

# 『しのびね』と「しのびね型」物語

## ―「しのびね型」話型の再検討―

安達敬子

### はじめに

いわゆる「しのびね型」物語と呼ばれる擬古物語の作品群は、院政期に成立した散逸古本『しのびね』を起点とする共通した構造を持つと考えられてきた。中世に多い悲恋遁世譚のなかでも、特に帝に愛人を奪われた男の悲痛さに焦点が絞られており、物語の構成要素は次のように整理されている。

- 女主人公は葎の宿の姫君。
- 権門の貴公子に見出される。
- 男の親の迫害等により女は失踪。
- 流浪の末、女は宮中に入る。
- 帝の寵を受ける女と再会するも絶望した男主人公は出家、あるいは死去。
- 女は立后し栄華を極める。

なかでも、古本『しのびね』を改作した現存本『しのびね』（南北朝期）と『むぐら』・『あきぎり』（共に鎌倉期成立）は、相互に関連しながら成立しており右の典型的構造を持つ物語として、「しのびね

型」物語群において中核をなすものといえよう。室町物語『しぐれ』も、これら三作品（特に『あきぎり』）と密接な関係があると考えられ①、狭義の「しのびね型」の典型的話型を有している。

また『しぐれ』は、鎌倉前期に成立した散逸擬古物語『恋に身かふる』の改作とされ、室町物語に改作された際にも「しのびね型」話型がそのまま引き継がれたものと考えられている②。ただし、『恋に身かふる』は男が出家する『しぐれ』とは異り、恋死する結末であったとする説が提出されており③、これは従うべき見解と考える。

それならば、本来一つである物語が恋死と出家遁世という二つの結末を持ったことになる。先に「しのびね型」話型は、「絶望した男主人公は出家、あるいは死去」と説明されていたけれども、そもそも「出家」と「恋死」とは根本的に対立するはずのものではなかったか。

人を恋ひては、或いは望夫石と名をとどめ、もしは、つらさの余りに悪霊などになれるためにも聞こゆ。いかにも罪深き習ひのみこそ侍るに、それを往生の縁として、思ふやうに終りにけん、いとめでたかりける心なるべし。……況や、思はぬ人の為には、ことにふれつつあはれも知らんことわりもなし。思ひあまりぬる

時、富士の嶺をひきかけ、海士の袖とかこちて、ねんごろに心の

底をあらはせど、何のかひかはある。独り胸をこがし、袖をしぼ

る程は、いみじくあぢきなくなむ侍り。いかに況や、此の世ひ

とつにてやむべき事にてもあらず。其の報ひむなしからねば、来

世には又、人の心を尽くさすべし。此の如く、世々生々互ひにき

はまりなくして生死のきづなとならん事の、いと罪深く侍るなり。

此の度、思ひ切りて、極楽に生まれなば、うきもつらきも寝ぬる

夜の夢にことならじ。立ち帰り善知識とさとりて、かれをみちび

かん事こそあらまほしく侍れ。

古典集成)

『発心集』・卷五―二・「伊家並びに妾、頓死往生の事」(新潮

叶わぬ思いに焦がれ死にすること、愛着を断ち切り出家すること  
は、恋のあり方としてまさに正反対であるはずである。たとえ、女主人  
人公が帝妃として栄華を極める結末が一致したとしても、男の運命が  
かくも対照的であるにもかかわらず「しのびね型」物語が一括して同  
じ話型とされている問題について、『しぐれ』を含めた四作品から考  
察を試みることにしたい。

一

まず、男主人公の末路によって分類すると、現存本『しのびね』・『し  
ぐれ』は出家型、『むぐら』・『あきざり』は恋死型となる。そして、  
その結末は男の女主人公への感情と正確に対応しているのである。

《出家型》

『しのびね』

何〔中納言が姫君に〕こともこの世ひとつならぬことと思して、いまは上の御心に従

ひ奉り給へ。つゆうらめしと思ひ奉るべからず。……かくまで近

づき奉るも、いと便なきことなれど、いまだ御心とけぬことと見

奉りしがば、いまひとたびは何か苦しからましと思ひはべりてぞ

や。(中世王朝物語全集 傍線は稿者による。以下同じ)

「いかなる方へあくがれ出で給ふとも、女は身を心にまかせぬも  
のにて、思ひのほかなることもまたあらば、いと本意なかるべし。

御心となびき奉り給ふと思はばこそ、うらみもあらめ、いまより

は、あこがごとをこそ思さめ。」……姫君は、「ただいづくまでも、

もろともに具しておはせよ。さらに残りどまらじ。おくらかし

給はんが心憂きこと」と慕ひ給へば、……「ただいま、まづいづ

くまでも具しておはせよ」とて、恥のことも覚えず、中納言に取

りつきて離れ給はねば

『しぐれ』

我心〔中侍ノ心中〕にもあらずして、かく別れぬる事を今は人を恨むべきにもあ

らず。かかるゆゆしき事しける大将のもとへ、あながちにせめや

り給ひし大臣殿のうらめしく口惜しくて、かからざりせば妹の君

も恥づかしき事あらんやと、今はいかに思ふとも甲斐あらじ。た

だいかにしてかしこを出しぞと問ひ聞きて、慰まばや。ゆゆしき

事どもしける。大将のもとのみ口惜しくて、進めやり給ひし父大臣の御心もかやうの事を明らかに聞きては、いかさまにても世にあり巡らんとも覚えず。

(永正十年絵巻『しぐれ物語』適宜漢字表記に改めた。以下注記のないものはこの本文を用いる④)

出家型では、男主人公は帝の寵を受ける身になった女を恨まない。『しのびね』の中納言は姫君の愛情に全幅の信頼を置いており、姫君も中納言への貞節を守り彼への愛は激情的と呼ぶべきものである。『しぐれ』の中将の場合も、彼の怒りと恨みは、女君を追い出し大将の姫との結婚を強いた父大臣に向けられている。

### 《恋死型》

#### 『むぐら』

はるかに夜更けて内裏帰り渡らせ給ふ御気色は、大将殿は見まゐらするも、さささきよりは恨めしく覚えさせ給へば、立ち隠れ給ひぬ。<sup>(天徳)</sup>「しばしは心ならぬ事ならば、つつましげにもありけむ、今はうちとけなつかしき様にこそはあたりまゐらすらめ」など、……「今はその事も世に思し出でじ。ただいみじき幸ひかなとのみぞ思はるらん」と恨めしくて、いかにも物など参る事なく、今は恨めしからぬ人もなく、内裏わたりへさし出づべしとも覚え給はず。……今はかくと思ひ絶えぬべきに、姫君の今日明日とも知らぬ老い人を頼みておはするを、少しものの心知るまで見まほしけれど、心地も日に従ひて、果物などもつゆも見入れでのみ過し給えば、弱々しき心地して

(大将ハ) 筆も走らねど念じて、白き薄様にて、

葦田鶴の雲の上には遊ぶとも沢の小松にあはれかけなむ

「さて思へばあさましや」とて、

「この世には思ひ絶えぬる仲なれば君を待つ瀬の川を渡るらん

それも違ひやし侍らん。口惜しく」など書きて、引き結びて  
(中世王朝物語全集)

#### 『あきざり』

<sup>(天徳)</sup>おのづから言の葉ばかり思ひ出でよ引く手に靡くならびありとも

雲の上に光を照らす月影もうしとて山に我ぞ入りぬる

と、書き給へるを、まことにいかに思ひ出にけるぞやと、(中宮ハ) あはれさも世の常ならずおほえ給ひながら、今さら言ひ交はさんも心づきなければ、かひなし。

宮の大納言⑤は、命婦に会ひて、ほのめかし出でしよりは、なかなかなるもの思ひの花のみ咲きまさりて、心細さもせん方なくおほえ給ふままには、日に従ひて、物なども見入れ給はず。などか一条りの返事だになからんと、恨めしさも取り重ねたり。ただ、我が憂きからにやと思ひなし給へど、なほ人は恨み多くよろづ思し続けられて、過ぎにし方の思ひは、数ならざりけりと思ふにも、人(中宮)は露ばかりも思し出でぬものゆゑ、片思ひもよしなく

おぼえ給ふまに、まめやかに心地も苦しく、弱々しくおぼえ給ふ。

(中世王朝物語全集)

かたや、恋死型においては、『むぐら』の大将は、女君が帝の寵愛を嬉々として受け入れ自分を捨てたと疑い、ひがみ、嫉妬して恨みに恨んでいる。『あきぎり』の宮の大納言もまた、呪詛によって女君を忘れた己れの非を認めつつも、入内して時めく恋人に恨めしさを抑えきれない。たとえ、実際には女も男を思い悲嘆に暮れていても(『むぐら』の場合。『あきぎり』の中宮は男への思いを断ち切っている)、その真情は通じることなく、男主人公は恨みと愛執で我が身を滅ぼしてしまうのである。彼らは失踪した女君と再会はおろか、文のやりとりさえ叶わず苦悶の死を遂げる。

ここにおいて「しのびね型」作品群のなかで、主人公二人の男女の關係がそのまま男の運命に連動しているさまが対蹠的に明らかになる。男の想念の中で女の心が自分から離れたとなれば、その恨みが悲憤や執着となり彼を悶死に追いやる。この傾向は、「しのびね型」のバリエーションと考えられる『いほでしのぶ』の内大臣と一品宮にもあてはまるであろう⑥。

一方、女の愛情をつゆも疑う必要がない『しのびね』の中納言にあっては、片思いの妄執は無縁である。彼の選択肢は女君の願いを容れて共に逃避の拳にでるか、女君を捨てて単独で出家するかの二つに一つであった。

二

さて、『しぐれ』の中將も、現存本『しのびね』と同じく出家遁世の途をたどったのであるが、ことは中納言ほど単純ではない。中納言が二度にわたって女君と宮中で逢瀬を持つのにひきかえ、中將は姫君の失踪後再会かなわず、互いの愛情の確認もできないまま出家を遂げている。しかも、出家直前に姫君の乳母子侍従と会う際には、事の真相や出家については胸に秘め、ただ姫君への文だけを託してさりげなく姿を消した(永正十年絵巻の本文)。大東急文庫蔵永正十七年写本・正保慶安頃刊本の本文では、中將は髻を切り出家の意志を侍従に告げ、さらに全ての事情をおとくから聞くよう言い遺している。他本に比して、永正十年絵巻における中將の絶望と孤独はより深いのであった。

もちろん、現存本『しのびね』の中納言も女君との仲を引き裂いた父を恨まぬわけではない。

「とにかくに、殿の恨めしき、我を世にあらせんとし給ふことなれど、この君(姫君)をうしなひて、行末も知らずなりなば、いかにも憂き世にたちまふべき我が身かは」

しかし、女君と共に出奔することを断念した出家の決断は、父の立場を顧慮した故という一面を持っていた。

これも心からぞや、いかなるところへもひき具して、巖のうちに、も、もろともに過ごしなばやと思しよる折々もあれど、また、「我が身こそあらめ、かばかり上の、なのめならず思して、御心をつくし給ふに、ひき具しなば、殿をもよしと思し召さじ。また若君のためにも、我かくなりぬと思し召さば、あはれも添ひて、人と

もなさせ給ふべきを」と思しまはすに、かたがたいとほしかるべし。「ただ我が身ひとつをなきになして、のこりとどまらん人々、親たちをも心安くあらせ奉らん

中納言の出家は、自己を犠牲にすることで父を含めた周囲の人々の幸福と安寧を祈るという意図からでていた。中納言の孝心に対し、『しぐれ』の中將の父に抱いた怒りと恨みは深甚であった。前出の引用箇所以外にも、父親への恨みは執拗に述べられている。

『しぐれ』

(女君ノ) 出でける程の心地、思ひ遣らるる憂さに引き替へ、めでたき契り、いかばかりかうれしかるらんと思ふさへ、また大臣殿のつらさ恨めしさ限りなし。

倭文の芋環繰り返せども詮方なきままには、大臣殿の恨めしさ、いかなる世にか忘れん。

中將の心中思惟「よしなきこと故にまたもなき子を失ひ給へるぞかし」からも、出家には女君を失った悲嘆ばかりではなく、父への面当てといった趣があったことがうかがえる。物語の語り手も、最後まで中將と妹姫を不幸に追いやった元凶として、父大臣の冷酷な仕打ちを指弾してやまない。

大臣殿、いかに悔しく思されけん。人はいたく強ちなることをば言ふまじきにこそ。中將もかくなりぬ。女御のおほえもなし。(帝が) 承香殿(女君)を御覽せざらましかば、麗景殿(中將ノ妹)さしも情けなき事あらましかば。報ひある事にやとおぼゆ。……こ

れにつけても大臣殿のみぞ恨めしき。また、そのみならず、中將の無念は女君の周辺の人々にまで向けられた。

「恋の病に沈みて失せにけると聞くと、誰かあはれと思ふべき。侍徒などもめでたき事に心移りて、おこがましくこそ思はんずらめ」など、つらく恨めしくおぼゆれば、

こうして繰り返される、男主人公の尽きせぬ恨みはむしろ恋死型に近いといえるだろう。

たとえば、侍徒に託された中將の文にある次の和歌は、恋死にこそふさわしいのではあるまいか⑦。

みつせ川逢ふ瀬と聞くを頼みつつ死出の山路の急ぎをぞする  
恋死の歌として『むぐら』の大将が死後に残した「この世には思ひ絶えぬる仲なれば君を待つ瀬の川を渡らん」がこれと類似した趣を持つ。

同じ中將の文に、

君故に身はいたづらになりぬともあはれとだにも思ひおこせじ

右の歌について、『しぐれ』諸伝本の異文は次の通り。

君ゆへに山のおくには入りぬともあわれとだにも思ひをこせじ

(大東急文庫本)

君ゆへに身はいたづらになりぬともあはれをだにもおもひをこせじ

(正保慶安頃刊本)

じ

恋ゆへに身はいたづらになりぬともあはれとだにも思ひおこさば

(東洋文庫蔵奈良絵本)



これについても、類歌に『あきぎり』の主人公の遺詠「君ゆゑに身はいたづらになしはてまよふ闇路をとはずもあらなん」がある。

ところが、散逸古本『しのびね』には、当該歌と明らかに関わりを持つ次の和歌が存在していた<sup>⑧</sup>。

『風葉和歌集』・卷十八・雑三

本意遂げて後、同じ人のもとにさし置かせける

しのびねの中将

あはれとも思ひ起こせよ白雲の棚引く山に跡絶えぬとも

(一三七二) (岩波文庫『王朝物語秀歌選』)

女の堅固な愛情を確信しているからこそ出家を遂げ得たであろう古本『しのびね』の主人公は、「あはれとも思ひ起こせよ」と残した恋人に詠みかける。しかし、恋する相手に「あはれとだにも」期待できぬ『しぐれ』の中将が、はたして決然と出家できるだろうか<sup>⑨</sup>。『うつほ物語』の仲澄や『源氏物語』の柏木以来、つれない女に執深く恋着する男の末路は悶死であった。既に述べたように、『しぐれ』の原作『恋に身かふる』は主人公が恋死する物語であったという。死すべき男主人公の運命がどこかの時点で出家遁世に変更されたため、『しぐれ』は愛人への恨みを父にふりかえて強調することになった。しかし、上記中将の詠歌には、原作の恋死の要素が痕跡として残されたため、出家遁世の歌としてはやや不自然な表現になってしまったと思われるのである。姫君との決定的な断絶も然りであろう。

くわえて、出家決行の前、中将が心中ひそかに両親に別れを告げる場面(永正十年本)、

母上、「とく出で給へ」との給へば、限りと知り給はずやとあはれにて、

たらちねの親の心の闇故に暗き道にやなほ惑ふべきと思すに、引き返す心地しながら、内裏に参り給へり。

「暗き道に惑ふ」とは、我が子を出家に追いやった親の歎きのために、出家してもなお中将が苦しむことと一応は解釈できる。この和歌も『あきぎり』の宮の大納言が死の床で詠んだ

たらちねの心の闇にいとどしく暗き道にも入りぬべきかな

と、ほとんど共通した表現を持つことが指摘されている<sup>⑩</sup>。

『あきぎり』においては、女君の忘れ形見である幼い娘への思いが、死後に彼を更なる煩惱の闇に追いやる意である。文脈としても自然であり、この形が本来のものではないだろうか<sup>⑪</sup>。

大東急文庫本『しぐれ』は、出家前の中将がおといに預けた文に、「一人こそ思ひ入りぬれ山の端につきせず物を思ふ身なれば」に続いて「たらちねの親の心の闇故に暗き道にやなほ惑ふべき」の和歌を掲げるが、ここでは親の賢しらのために女君への愛執に迷う意と解釈すべきであって、やはり出家の歌としてふさわしいとは言えない。こうした不適合はおそらく、恋死した主人公の和歌を出家遁世という異なる場面に転用したこと起因すると考えられる。

以上のように出家遁世型でありながら、『しぐれ』の世界は、実は現存本『しのびね』よりも『むぐら』・『あきぎり』に近く、緊密に関連する「しのびね型」四作品の中で、他ならぬ『しのびね』だけが男主人公の造型と女君との関係について、際立った異質さを示している

ことになる。

三

ところで、「しのびね型」物語の始発とも言うべき散逸古本『しのびね』が、男の出家遁世の悲劇よりも女主人公の「しのびね」に泣く悲恋を主題とした「女の物語」であるという見解<sup>⑫</sup>は、既に定説となっている。院政期には、他にも様々な「女の物語」が創作されたことが散逸物語研究によって明らかにされており、以下のような中世の「しのびね型」物語に通じるパターンを持つ作品が存在していたようである。そこに共通するのは帝の存在が相愛の男女を引きさく設定であった。

◎『玉藻に遊ぶ』

尚侍（蓬の宮） 後に出家・関白（権大納言）・朱雀院（帝）

◎『みづから悔ゆる』

左大将・尚侍・帝？  
内大臣・中宮・帝？

◎『末葉の露』

右大臣（宰相中将）・女院、皇太后宮・帝？  
（登場人物の最終身分は『風葉和歌集』による）

後冷泉朝から十二世紀半ば頃までに成立した右の散逸物語は、不遇な女君が貴公子と相愛の仲になるも、様々な障害によって引き離され挙げ句に帝の寵を受けるといふ、「しのびね型」と共通する枠組みを持っていたと推測されている。しかし、資料からうかがえる限り、男主人公は誰一人として出家遁世したりせず、後に顕官として栄えている。同時期の古本『海人の刈藻』は悲恋遁世譚ではあるが、当初から藤壺

女御への一方的な「及ばぬ恋」を主題とする物語なので、狭義の「しのびね型」とは異なる性格のものと考えるべく。

『親子の中』については、

『風葉和歌集』・卷十四・恋四

心ならず隔たりて逢ひがたくなりける女に、病にわづらひけるころ遣はしける

親子の中の内大臣

さりともと思ふばかりにかけとめし命も今は限りなりけり

（一〇三〇）

の所載歌から、中宮となった女君に男が恋死した可能性が指摘されている<sup>⑬</sup>。とはいえ、内大臣を主人公とするにはやや身分が重すぎる憾みがある。これは内大臣に昇進する以前、まだ彼が若く身軽な時期の出来事なのではないだろうか。とすれば、彼は結局病の床から回復した可能性が大きい<sup>⑭</sup>。『玉藻に遊ぶ』の権大納言や『末葉の露』の宰相中将も、それぞれ関白や右大臣に栄達した。出家したことが明らかなのは『玉藻に遊ぶ』の女主人公蓬の宮である。実のところ、平安朝物語では、薫と浮舟や『朝倉』に見る如く、権門の貴公子が自分より劣位の女のために身を滅ぼす例はほとんど見られない。三角関係によって追い詰められるのは基本的に女の側であった。帝が恋敵の立場で介入する物語の嚆矢とされる『夜の寢覚』にしても、帝の横恋慕のために偽死をよそおって失踪し、果ては出家するほどに苦悩の限りを強いられるのは、男主人公ではなく寝覚上なのである。

おそらく散逸した多くの後期物語のなかで、女の運命の変転と嘆き

が読者好みの主題として取り上げられ、そこに帝との三角関係という趣向が繰り返し用いられたのであろう。色好みの権大納言（後に右大臣）が里下がりした官旨を盗んで北の方に据え、春宮（後冷泉院）との仲を引き裂く『心高き春宮官旨』はこの種のパターンの変奏と考えられる。

他にも、『あきぎり』・『しぐれ』に共通する呪詛によって男君が心変わりする趣向も、『末葉の露』に類似のものが存在していたことが指摘されている。

『無名草子』・末葉の露評

宰相中将の、病よくなりて参りたるに……物怪のしわざなれども、宰相中将の心、ただ変はりにかはるこそ、いと浅ましくあはれなき。……さても思ひ出もなき、宰相中将たち帰りてばかりめでたき。（古典集成）

あるいは、帝の関与は不明ながら、後冷泉朝期の成立とされる『葦火焚く屋』は、男の父親が女主人公の頼りない身の上を嫌って、息子を裕福な家の女と無理に結婚させる悲劇を描いていたらしい。

『風葉和歌集』・卷十三・恋三

宰相中将、大式が娘に心にもあらず通ひけるころ、かくは慣らはざりつるにと心細くてよみ侍りける

葦火たく屋の源大納言女

我ながらなど思ひけん目の前にかかる心は見せじものぞと

（九六六）

かへし

かばかりの心を人に見せながら今日まで生ける身をいかにせむ  
（九六七）

『狭衣物語』・卷三

「何物語ぞや、かかる事のあるよ」と言えば、「そののみぞ多かる。

『葦火焚く屋』の、親の心こそ世に憎けれ。少将もあまりなれども、男、男親に従ひたるぞとよ」など言ふを、母宮聞きたまひて、物語にてだに、さばかり心づきなきことを

（新編全集）

『しのびね』・『しぐれ』も、事の起こりは息子に対して父親が有利な結婚を強制したことであった。

したがって、冒頭に示した「しのびね型」話型の構成要素は、男の末路を除いてほぼ出揃っていたことになる。それにしても、院政期物語のもつ傾向、か弱い女の悲嘆が重視されがちな中で、古本『しのびね』において男の出家遁世が描かれたことの意義は大きい。たとえ尚侍の嘆きを一層深めるためであったにせよ、出家遁世を執行すること薄幸の女と共に苦しみ、身を捨てる貴公子が初めて出現したからである。現存本に比して、古本『しのびね』はたしかにより多く「女の物語」であったかもしれないが、擬古物語における「男の悲恋」という主題への関心の萌芽として、古本『しのびね』を物語史に位置づけることができるのではないだろうか。

四



先に触れたように、現存本『しのびね』の中納言には、出家遁世か、或いは女との逃避行かという二つの選択肢があった。後者も彼の決意次第で不可能ではなく、何より女君が熱烈にそれを望んでいた。当初から出家に傾斜していた中納言の選ぶところではなかったにせよ、「逃避行」が先に引用した箇所も含め、しばしば言及されたことは注目に値する。

出家後、姫君にあてた文にも、中納言が「一緒に逃げるため後で迎えに来る」と、姫君を偽ったことへの弁解が縷々述べられていた。

思ひ入るみ山隠れの住まひにも形見につなぐ人の面影

うち捨て奉ること、いかに恨めしく思すらん、されど思ふ心あれば、ひたぶるにも思しそ。いまはただ、帝の御心にたがはでさぶらひ給へ。いづくの野の末までもひき具してこそあらまほしけれども、あことがことを思ふゆゑとよ。

「逃避行」とは、男が女を一方的に誘拐するのではなく、二人手を携え世のしがらみから脱出することである。少なくとも姫君には、その覚悟があったことを改めて確認しておきたい。

現実的なレベルで逃避行が問題になっているのは、『しのびね』以外では『石清水物語』がある。

いかならんいはほの中の住家をも尋出でて、あてかくしきこへんも、かたかるまじきゑびす心なれど、たゞ一筋にこの御ためには、たへぬいのちをいたしても、よからん事をあらせきこへばやと、とし頃思ひすぐし、かみなき位にならせ給はんを見奉らばやとの

みおもふ故に、数ならぬ身ひとつをくだきて

(鎌倉時代物語集成)

東国武士たる伊予守は、帝を中心とする宮廷秩序の埒外に在るため、逃避行自体は心理的に困難ではなかったという<sup>15)</sup>。逆に言えば、中納言にとって、逃避行は単に帝の勘気を蒙り一族の失脚をもたらすだけではなく、宮廷貴族としての自己否定を意味するのである。「えびす心」の持ち主なればこそ、「我身のため計を思はゞ、かたくしもあらん」と嘯くことができたのであるが、伊予守もまた、貴族社会に属する木幡の姫君のために逃避行を断念したのである。唯一、略奪が可能であったのは、宮廷ヒエラルキーの頂点に在る帝であった。

ちなみに『しぐれ』にも

いかにのたまふとも明日一日だにもいなば、いづ方へも具して出でなむとおぼして、例の女君の御方へおはして、よろづうち語らひて、「あはれいかに心細くおぼすらむ。この度ばかりぞまからんずる。いかなる岩木の中にももろともと思ふに、御心長くおぼせ」などなぐさめ給へども

と、逃避行への言及があるが、二人の仲に反対する父親への反抗という文脈であるので、帝妃とのそれとは全く意味合いが異なっている。

物語史において、擬古物語の主人公達が夢想するだけに終わった逃避行を実現させたのは、いうまでもなく『伊勢物語』六段の男である。むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きにきけり。芥川といふ河を率ていきければ、草のうへに置きたりける露を、「か

れは何ぞ」となむ男に問ひける……

(古典集成)

現存本『しのびね』や『石清水物語』にみられる叙述「いづくの野の末までもひき具して」・「いかなるところへもひき具して」・「いかならんいはほの中の住家をも尋出でて、ゐてかくしきこへん」などが、六段を意識した表現であることは、従来から指摘されてきた<sup>16)</sup>。

周知の通り、二条后章段のクライマックスである六段では、女が鬼に喰ひ殺されてしまう。この段の逃避行と死が、王権によって抹殺された恋の象徴的な形象であるとすれば、それは『伊勢物語』の中で繰り返し出現していた。

## 十二段

むかし、男ありけり。人のむすめを盗みて、武蔵野へ率てゆくほどに、盗人なりければ、国の守にからめられにけり。女をば草むらのなかに置きて逃げにけり。道くる人、「この野は盗人あなり」とて火つけむとす。女わびて、

武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれりとよみけるを聞きて、女をばとりて、ともに率ていにけり。

## 異本章段

昔男ありけり。女をぬすみてゐてゆく道にて、水のまむと問ふに、うなづきければ、つきなども具せねば、手にむすびてのます。さてゐてのぼりにけり、女はかなくなりければ、もとの所へゆくみちに、かのし水のみし所にて

大原やせがゐの水をむすびあげてあくやといひし人はいづら

ぞ

といひてきえかゑり、あはれあはれといへどかひなし<sup>17)</sup>

(群書類従本)

むかしをとこ、女をぬすみて、水のある所にてのまむと問ふに、うなづきければ、手にむすびてのます。さてゐてのぼりけり。をとこなくなりければ、もとの所へかへりゆくに、かの水のみし所にて

大原やせがゐの水をむすびつつあくやといひし人はいづらは

(小式部内侍本)

(池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究』校本編・有精堂、昭和三五) 二人は追われ、火をかけられ、逃避行の中で相手に死なれている。女あるいは男の命を奪った者は六段と同じく権力の手であつたらうし、「もとの所へゆく」(異本章段)のも、追手に捕らわれ引つ立てられての帰還と読むべきであろう。そして、六段の非定家本本文「えうまじかりける女を年へてよばひわたりけるを、からうじて、女心あはせて盗みいでて」は、女の側の積極性を強く示唆している。

こうした『伊勢物語』の逃避行からただちに連想されるのが、『古事記』仁徳紀に記された速総別王と女鳥王のエピソードであろう。

『古事記』仁徳天皇

亦天皇、其の弟速総別王を以て媒と為て、庶妹女鳥王を乞ひたまひき。茲に女鳥王、速総別王に語りて曰はく、「大后の強きに因りて八田若郎女を治め賜はず。故、仕え奉らじと思ふ。吾は汝命

の妻に為らむ」といひて、即ち相婚ひましき。是を以て速総別王、復奏さざりき。爾に天皇、女鳥王の坐す所に直に幸でまして、其の殿戸の闕の上に坐しき。是に女鳥王、機に坐して服を織りたまへり。爾に天皇歌曰ひたまはく

女鳥の 我が王の 織ろす機 誰か料ろかも

とうたひたまひき。女鳥王答へて歌曰ひたまはく、

高行くや 速総別の 御襲料

とうたひたまひき。故、天皇、其の情を知らして、宮に還り入りましき。此の時、其の夫速総別王到来りませる時、其の妻女鳥王歌曰ひたまはく

雲雀は 天に翔る 高行や 速総別 鷓鴣取らさぬ

とうたひたまひき。天皇、此の歌を聞かして、即ち軍を興して殺さむとしたまひき。爾に速総別王・女鳥王共に逃げ退きて、倉椅山に騰りたまひき。是に速総別王歌曰ひたまはく、

梯立の 倉椅山を 嶮しみと 岩搔きかねて 吾が手取らす

も

とうたひたまひき。又歌曰ひたまはく、

梯立の 倉椅山は 嶮しけれど 妹と登れば 嶮しくもあらず

とうたひたまひき。故、其の地より逃げ亡せて、宇陀の蘇邇に到りし時、御軍追ひ到りて殺しまつりき。

(新編全集)

『日本書紀』も同話を載せるが、『古事記』の方が、女の主導性がより

際だっている<sup>18</sup>。后がねとの密通は紛れもなく王権侵犯を意味し、謀叛と直結することから<sup>19</sup>、叛逆者となった二人は逃避行の果てに誅殺される。密通から逃避行、そこから死は原理的な帰結である。直接的な影響関係とは異なるレベルで、『伊勢物語』六段はこの構造を共有している。本来の鬼一口は、後人注のように女の兄が妹を取り返したことの比喩ではなく、帝にそむき男と出奔した女が文字通り死を与えられたと解釈されるべきなのである。

そして、『伊勢物語』六段で描かれた恋の罪と挫折は、『源氏物語』柏木の密通と死を経由することにより、及ばぬ恋の悶死という新たなニュアンスが加わっていた<sup>20</sup>。

それはたとえば、中世「しのびね型」物語の基本型を備えた画期的な作品として、中島泰貴氏が注目した『隆房集』にも明白に顕れている。『隆房集』は、手の届かぬ立場になった恋人のつれなさを嘆く男の歌集である。

四月みあれの日、人の使にて、立ちながら逢ひたりしに、「今はこの世を思ひ捨てて、いかならむ野山の末にも、二人あらむ」と語りし時、かみにかけたりし葵を取りて、「これは何ぞ」と問ひしことの、忘れがなければ

22 しるらめやせめてあふひのまれば名をさへたどるけふのかざしを

かくばかり堪へがたく覚ゆるならば、はかなき世に、とてもかくてもありなんと思ひ取りて、「いかならん所へも引き具して去な

む」と思へども、「それも人聞きおびた、しかりぬべし。またかくてもあるべき心地もせず。とにかくに、われを苦しむる君なりけり」とあぢきなく

89 いかにしていかにすべしと覚えぬはわれと君との中にぞありける

(三弥井書店・中世の文学)

中島氏は、愛人を帝に奪われた男の物語として、『伊勢物語』を『隆房集』が撰取したことで、「しのびね型」を「女の物語」から「男の物語」へと転換させたと論じた<sup>21)</sup>。ただ、『隆房集』には『伊勢物語』だけでなく柏木の影響も濃厚にうかがえるのである。

『隆房集』

何となく悩ましくなりて、おどろくしからねど、起き臥しもたやすからぬを、これもたれゆゑぞと、まめやかに心憂くて

30 君ゆゑの乱り心ちはところせや思ひとけども結ほほれつ、

『源氏物語』・若菜上

その夕べより、乱りごちかきくらし、あやなく今日はながめ暮らしはべる。(古典集成)

柏木

さるは、たちまちにおどろおどろしき御ごちのさまにもあらず、月ごろものなどをさらに参らざりけるに、いとどはかなき柑子などをだに触れたまはず、ただ、やうやうものに引き入るるやうに見えたまふ。

『隆房集』

「まめやかにこの思ひの積るつもりは、後の世の罪とならむ事は疑ひなし。それをば君ならでは、たれかは助けん」とて

84 さもこそは生けらんかぎりつらからめ後の世をだにあはれとはいへ

「まめやかに情なきことにこそあれ、死なん世には、さりとも人よりはあはれと思ふこともありなんものを」と心をやりて覚ゆれば

99 恋死なばあはれをわれにかげろふの常なき世とも思ひ知れかし

『源氏物語』・柏木

夕はわきてながめさせたまへ。とがめきこえさせたまはむ人目をも、今は心やすくおほしなりて、かひなきあはれをだにも絶えずかけさせたまへ。

同

今ほとと燃えむ煙もむすほほれ絶えぬ思ひのなほや残らむあはれとだにのたまはせよ。心のどめて、人やりならぬ闇にまだはむ道の光にもしはべらむ、と聞こえたまふ

『伊勢物語』の男と柏木は、共に高貴な女に恋して身を滅ぼしたためか、後期物語に受容された『伊勢物語』は、しばしば柏木の陰影を湛えていた<sup>22)</sup>。報われぬ片恋ゆえの死が逆に『伊勢物語』の男の理解にもち

こまれたのかもしれない。中島氏が説くように、中世「しのびね型」の話型が院政末期の『伊勢物語』受容という触媒によって完成したのであれば、「しのびね型」物語の多くが男の恋死という結末を持つのも当然であろう。現に、『むぐら』の主人公の死の描写には、明らかに柏木の影響がある<sup>23)</sup>。

『むぐら』

今はかくと思ひ絶えぬべきに、姫君の今日明日とも知らぬ老人を頼みておはするを、少しものの心知るまで見まほしけれど、心地も日に従ひて、果物などもつゆも見入れでのみ過ごし給えば、弱々しき心地して、あり経べしとも覚え給はず。

今はとてあくがれ出づる魂も君が宿にはやすらひやせむ

### おわりに

再び、現存本『しのびね』に戻れば、この作品が女君との関係性において、他の「しのびね型」物語と異質なあり方を示していることは前に述べた。その異質さは、『しのびね』が柏木の性格を持たないことにも関連している。柏木の性格とは男の片恋故の煩悶である。どこまで意識されたかは別にして、『隆房集』とは正反対に、現存本『しのびね』が言及した逃避行は図らずも『源氏物語』以前に回帰していた。それを可能にしたのは、女君の男主人公との激しい一体化への希求である。『しのびね』の（結局は実行されない）逃避行が照射するものは、帝との緊迫した関係を背景に、最後まで男と共にあるうとす

る女の強い意志であり、それは男の出家後も変わることがなかった。男との絆を保ち彼の遺志を継承しようとする女君の姿勢は、后となつた後も微塵もゆるがない。

なほ人（中納言）は世を背き、身をやつして、ならばぬ様になり給ふに、我が身はつれなくて、人に見え奉らんことのかなしくて、心もゆかぬなるべし。

「我も様をも変へてあらまほしけれども、心にまかせず、また御ことの心苦しさに、心ならず過ぐすぞとよ。……」（大殿ガ若君ヲ）いはけなかりし時、なさけなくひき放ち給ひしこと（中宮ハ）思し出でて、ただいまの心地のみせられ給ふ。大殿のことは中宮も、こというたてく思し召せども、若君のことを思せば、知らず顔にて過ぐし給ふ。

従来、古本『しのびね』に比べて、現存本には「女の物語」の性格が後退しているとされているけれども、敢えて帝に背く逃避行さえ辞そうとしない女君こそ「決然たる態度」と評せられるに値するのではないだろうか<sup>24)</sup>。女君の態度の明確さは簡単に中世的と呼ばれるべきものではない。古本の「恋の悲嘆に忍び泣く女君」とは異質であっても、現存本『しのびね』の女君も男主人公に劣らぬ主題性を担う存在なのだと思われる。古本『しのびね』がそうであったように、精神的比重において女と男はやはり対等に扱われている。

『しぐれ』の姫君にこうした精神がないの言うまでもない。なぜなら『しぐれ』は、男の出家という外面的形態においては『しのびね』



と共通するが、他の『むぐら』・『あきぎり』と同じく、男女の絆が失われた悲劇を男の側から描いているからである。また、それは帝との関係にも反映しており、『むぐら』・『あきぎり』では、帝の寵愛を受けたことをめぐって男女の間に葛藤が生じている。『しぐれ』は恋死型から出家遁世型に変容したために、父と息子の葛藤になってしまつたに過ぎない。少なくとも、帝と男が直接向かい合う関係はこの三作品には見出せない。

対して、現存本『しのびね』は、明らかに帝と主人公二人が対峙する構図を提示した<sup>25)</sup>。「逃避行」の物語世界における意義はかくも大きいのである。

擬古物語研究において、頻繁に用いられる「しのびね型」なる用語の基となる現存本『しのびね』が、同類とされる作品群とこれ程に異なる内実を有していることに改めて注意を喚起したい。同時に、「恋死」から「出家遁世」へ、あるいは「女の物語」から「男の物語」へと、いふ中世の物語史研究の公式的理解についても、現存するテキストをより綿密に分析する立場からのさらなる再検討が常に必要であろう。

〈注〉

① 神野藤昭夫「『しのびね物語』の位相——古本『しのびね』・現存『しのびね』・『しぐれ』の軌跡——」（『散佚した物語世界と物語史』若草書房、平成一〇）・辛島正雄「擬古物語とお伽草子の間『あきぎり』を軸として」（『中世王朝物語史論下巻』笠間書院、平成一三）・金光桂子「中世王朝物語『あきぎり』引歌小考——室町物語『しぐれ』と

の関係に及ぶ」（『国語国文』83巻7号、平成二六）参照。

② 中野莊次「風葉和歌集考・下」（『国語国文』3巻3号、昭和八）。

③ ①辛島論文参照。

④ 徳田和夫「お伽草子『しぐれ』永正十年絵巻の紹介と翻刻」（石川透編『魅力の奈良絵本・絵巻』三弥井書店、平成十八所収）による。

この本文は、①金光論文により最も古態を残すものと評価されている。

⑤ 底本は「宮の大将」。文脈上から「大納言」の誤りとして訂正した。

⑥ 『いはでしのぶ』は従来、内大臣と伏見大君の関係が「しのびね型」とされてきた。確かに、形態としては「しのびね型」のパターンをそなえているが、内大臣にとって伏見大君は愛人の一人にすぎない。彼が本心に心を尽くして愛するのは、正室の一品宮だけである。その最愛の妻を宮の父院に引き離され、白河院に取り籠められて、内大臣は悲嘆のあまり悶死する。ここでは院が、悪役である父と女を奪う帝を兼ねる役割を果たしている。一品宮との関係こそが内大臣をめぐる物語の主題であり、本質的に「しのびね型」悲恋譚を形成しているのである。

⑦ 三角洋一「改作物語の和歌」（『物語の変貌』若草書房、平成八）は、『しぐれ』について「男君に死期がせまっているわけでもないのに、『しぐれ』の山ぢのいそぎ」と詠んでいることになり、もちろん『いそぎ』は準備・仕度の意には違いないが、ややそぐわない気がする」と述べる。

⑧ ①神野藤論文参照。

⑨ ①神野藤論文は、大東急本『しぐれ』の和歌は古本『しのびね』の和歌を語順を替えて改作したもので歌意は変わらないとするが、相

手に一切を期待できない『しぐれ』と「あはれ」を求めることのできる『しのびね』との差異は決定的であろう。

⑩ ①辛島論文参照。

⑪ 『むぐら』にも

こひわぶる人は雲井の月なれどくらきみちにぞわれはいりぬる  
という、宮の大納言の死の床での詠歌がある。

『いはでしのぶ』内大臣の臨終の和歌も類似の発想の歌といえよう。

こととへよ恋もうらみもはれやらでたれゆへならぬやみにまよ  
はゞ

⑫ ①神野藤論文参照。

⑬ 三角洋一「『おやこの中』と二条太皇太后宮式部」(『物語の変貌』若草書房、平成八)。

⑭ 帝の側に上がった女に絶望して重病の床に伏しながら回復するのは、『隆房集』に例がある。『風葉和歌集』の詞書では、死の床に伏す時は「心地限りになりて」(六五五、六八五、一〇〇五、一〇三二)・「心地限りにおほえ」(六二八、六五八)とあり、また「限りのさまにさへなりにければ」(一〇三三)・「今はの際に」(一〇四三)などの表現が見える。逆に病から回復した場合は「御心地例ならずおほえければ」(九四二)、「心地損なへりけるに」(一〇二九)の例が見える。他に病死した人物に「心地重くわづらひけるころ」(六三〇)、「病重くなりて」(六五二)、「病して弱くなりける時」(六五七)といった詞書が付されている。『親子の中』の内大臣について、「病にわづらひけるころ」という詞書だけでは必ずしも病死したとはいい切れない。

⑮ 『石清水物語』には、さらに次の記述がある。

なぞや、これよりかたき雲の上ならんことだに、身を惜しまずい  
のちをすて、みえぬ山路にもゐてかくしきこへて、人目思はで  
うちそひても、しばしはなど、うきよの思ひ出にも、我身のため  
計を思はゞ、かたくしもあらん。されど、さばかりあたらしき御  
身の、うきみひとつゆへに女御かういともいはせきこえぬだに、  
ゆ、しきあやまちをかしなるを、すへのよまでのうき名を伝へき  
こえんことは、いかゞあらん。たゞかひなき身のなげきをば、も  
のならず

⑯ 足立蘭子執筆「IV中世王朝物語の言葉 構造」(『中世王朝物語・御伽草子事典』勉誠出版、平成一四)・中島泰貴「『しのびね型』としての『隆房集』——物語文学史への視点——」(『中世王朝物語の引用と話型』ひつじ書房、平成二二)参照。

⑰ 阿波国文庫本の本文によれば、男女二人ともに死んでしまった。  
むかし、女をぬすみてゆく道に、水のある所にて、のまむやと問  
ふに、うなづきければつきなども具せざりければ、手にむすびて  
くはす。さてのほりにければ、もとの所にかへりゆくにかの水の  
みし所にて

大原やせがゐの水をむすびつつあくやととひし人はいづらは  
といひてきえにけり。あはれあはれ

⑱ 『日本書紀』では、雌鳥皇女から隼別皇子に求愛する場面はないし、  
天皇が密通を知るのは皇女の織繰女の歌から、また謀反を知るのは皇  
子の舎人の歌からである。『古事記』は、これらを全て女鳥王の歌に

している。総じて『日本書紀』の登場人物が多いのに対し、『古事記』は仁徳天皇と速総別王・女鳥王の三人に限定した構成をとっている。

⑲ 古代の謀反がしばしば天皇の御妻との密通の形で形象されることについては、吉村武彦「日本古代における婚姻・集団・禁忌 ―外婚制に関わる研究ノート―」（『奈良平安時代史論集上』吉川弘文館、昭和五四）・西山良平「古代王権の（侵犯）伝承 ―『古事記』中・下巻を中心に―」（中山修一先生喜寿記念事業会編『長岡京古文化論叢Ⅱ』三星出版、平成四）参照。

⑳ 柏木・女三の宮密通事件において、いかに『伊勢物語』二条后章段のイメージが浸透していたかについては、今井久代「柏木物語の「女」と男たち ―「帝の御妻をも過つ」業平幻想―」（物語研究会編『新物語研究3 物語「女と男」有精堂出版、平成七）参照。「さかしく思ひしづむる心も失せて、いづちもいづちも率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさまならず、跡絶えて止みなばや、とまで思ひ乱れぬ。」（『源氏物語』若菜下）から、「逃避行」がそのまま姦通の遂行の象徴的表現となっていることがうかがえる。女三の宮との密通は「逃避行」の連想と重ねられることにより、柏木の病死は、六条院に処罰される罪を内面化した形、ほとんど自死の様相を呈した。さらに、柏木の死に『うつほ物語』の仲澄の面影があることも既に古注釈に指摘されている。「うつほ云宮おと、にきこえ給このほどかくわつらふを物とはせつれば女のらうとなむいひける」（『河海抄』柏木巻）。久下裕利「四、求婚譚 柏木における仲澄の影響」（『物語の廻廊』新典社）参照。これによって柏木の恋は、王権侵犯と片恋の苦悩の二つの要素

を併存させることになる。相思相愛の男女からつれない女にむけて男の絶望的な哀訴へと、密通に関わる二人の関係が変容する分岐点が柏木である。

㉑ ⑯中島論文参照。ただし、『隆房集』の男は逃避行を夢想しても、「いかならん所へも引き具して去なん」と思へども、それも人聞きおびたたしかりぬべし」とあつさり放棄し、初めから実行する意志などはなかった。

㉒ 賀茂斎院に卜定された源氏宮に迫る狭衣には、従来から『伊勢』の影響が指摘されているが、明らかに柏木のイメージも投影されている。さりとも思しめし知るらんとこそ思ひつるを、あさましかりける御心ばへにこそ身もいたつらになりはべりぬべけれ」とて堰きもやらぬ涙に、何故かいたづらにもなりたまはん、いとど恐ろしうわりなしと思してうち泣きたまへるけはひなどの近きは、いとど来し方行く末のたどりも失せて、「今はかくだに聞こえさせじと、念じはべれど、もの思ふ魂あくがるとは、まことにこそは。現し心もなき心地して、いまさらに思し疎まれぬるにこそ」とて、「いでや、いまはとてかくても同じさまに世にはべるべきにもあらねば、見えぬ山路ももろともにやとさへ、思ひはべりぬれ」とさへのたまふ。〔『狭衣物語』巻二〕

「よし御覧ぜよ。この同じさまにてや、世にはべりける。かく見はてたてまつるまでと、あながちに過しはべるを、また御覧せられぬやうもはべらん。この世の思ひ出でにしはべるばかり、あは

れとだにのたまはせよ」

(同)

さかしく思ひしづむる心も失せて、いつちもいつちも率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさまならず、跡絶えて止みなばや、とまで思ひ乱れぬ。……いと憂しと思ひ聞こえて「さらば不用なめり。身をいたづらにやはなし果てぬ。いと捨てがたきによりてこそ、かくまでもはべれ。今宵に限りはべりなむもいみじくなむ。つゆにても御心ゆるしたまふさまならば、それにかへつるにても捨てはべりなまし」とて、かき抱き出てづるに、果てはいかにしつるぞと、あきれておほさる。……ほのかに見たてまつらむの心あれば、格子をやをら吹き上げて、「かういとづらき御心に、うつし心も失せはべりぬ。すこしでも思ひのどめよとおほされば、あはれとだにのたまはせよ」と、おどしきこゆるを

(『源氏物語』若菜下)

これに関して、⑯足立論文は、中世の悲恋遁世譚に類出する「山路」「野山」の語について、「伊勢」引用が必ずしも明示的でない『源氏物語』柏木の物語を引用しつつ、新たに明示的な『伊勢』引用を加えた『狭衣物語』をさらに引いている」と述べる。ただ、狭衣が実際に逃避行の拳に出ることは『狭衣物語』の世界観からして考えがたい。単に片恋の切実さを強調する修辭にとどまっている点では、後の『隆房集』と軌を一にしている。

⑳ 先に「しのびね型」とした『いはでしのぶ』においても、内大臣

の死去の場面の柏木の影響は顕著である。

⑳ 現存本『しのびね』中納言の女君に対する執着を指摘し、①神野藤論文が強調する「男君の決然たる出家行の悲劇性」に疑義を呈しているのは、大倉比呂志「しのびね物語」(『体系物語文学史 第四巻』有精堂、平成元)である。

㉑ したがって、中島泰貴「『しのびね型』」試論(⑯中島著書所収)の説く「女を共有する臣下と帝による君臣和合の理想」という「しのびね型」世界観には賛同しない。

本学教授

(二〇一四年十月一日受理)

(あだち けいこ 文学部日本・中国文学科教授)